
神に愛された童

パイン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神に愛された童

【Nコード】

N8305V

【作者名】

パイン

【あらすじ】

ある森に青の鬼と呼ばれれ童がいました。

青の鬼は、泣きながらあるものを探していました。

鬼が探し者を見つける時に惨劇にして残酷な話しの幕が上がる。

昔ある集落にとっても中の良い双子がいました。

しかし兄が、神様の森に入ってたきり帰って来ませんでした。

村長は、嫌がる村人を全員連れ搜索しましたが、とうとう見つかりませんでした。

弟は兄が、神様に連れて行かれたと何度言っても信じてもらいませんでした。

深い嘆きと人間に絶望した弟は、鬼になり村人全員を殺しました。

今でも神様の森の中で人を殺し続けながら最愛の片割れを探していると言う。

・

・

・

村からさらに離れた森の奥に森の神様楽しそうに花畑で遊んでいた。

「メファイ！」

「どうしました、リン？」

そんな神様に一人の童が着物を乱れながらも走って来ました。

「これメファイにあげるな！」

リンは、メファリストに一本の露草を渡しました。

「これを私に？」

「おう！いつも世話になってる礼だ」

白い頬を赤らめながら照れるリンにメフィストは、嬉しそうに笑うと深見のある葵色の猫っ毛に細い手を乗せ優しく撫でた。

「ありがとうございます、リン」

メフィストは、今までにない幸せを噛みしめながら自分の後ろにいる“末の弟”を狂喜な顔で見っていた。

・

ある村に数人の子供たちが、花いちもんめを楽しそうにしていた。

「こら！もう遅いから村に戻りなさい！」

村の大人の言葉に子供たちは、不満な声を上げてうた。

「やだ！もっと遊ぶの！！」

「次何やる？」

「達磨さんにしよ！」

大人は、なかなか自分のゆうことを聞かない子供たちにため息をつきながら仕方なくある伝承を言った。

「暗くなる前に村に帰らないと青の鬼に食べられてしまうはよ？」

大人のやけに低い声に子供たちは、顔をひきつらせ慌てて村に帰って行くのを満足そうに眺めながらふといきなり表情を暗くさせた。

「まだここまで来ていませように」

・
神様の森に一人の童が立っていた。

しかし童の周りには首のない死体が転がっておりその童の手にも首のない子供の頭を血ぬれの手で眺めていた。

「やっぱり子供の肉は美味しいね」

童は、手に持っていた首を落とすと血に濡れた唇で笑った。

「さて、お腹も膨れたし森の奥に行って見よう」

童は、うっそり笑いながら探し人に会うためさらに森の奥に行くとふと止まった。

「あれ？僕…何を探していたんだっけ？？」

少しの間不思議そうに小さな首を傾げていたが、直ぐに考えるのを止め森の奥に消えて行った。

そのさいに懷で赤い玉が光っていた。

・
がさがさ！

花を摘んでいたリンは、草むらの音に驚いて振り返ると自分とそう

年の変わらない子供がいた。

二人は、お互いに目を見開き唾然としていたが、リンの方が先に正気に戻り笑顔で子供の元に向かった。

「うわぁ、オレと同じ子供なんて久しぶりに見た！名前は何？」

「え、えっと…ユキオ」

「ユキオって言うんだ！何かオレたち前にも会ったけ？」

「え？た、多分…初めてだと、思う」

ユキオのじれったい言葉に気が短いリンが、切れた。

「まどろっこしいな！男だろ、はっきり言え！！」

「うう…そ、そんなこと言われても」

急に泣き出したユキオにリンは、慌てながら何かないかと探していたら自分がさっきまで作っていた花飾りがあった。

「ほら、本当は、メフィに渡すつもりだったけどやるよ」

「え？いいの？だってメフィさんに渡すはずだったんでしょ？」

なおも引き下がらないユキオにリンは、強引にその手に花飾りを握らせた。

「いいって、花飾りなんかまた作れば良いんだし！」

リンの言葉にユキオは、久しぶりに暖かい感触にせつかく止まっていた涙を流しながらリンに礼を言った。

「うお！ いっけね、もう夕方かよ！ 早く行かないとメフィに怒られる！」

リンが、慌ててユキオから離れようとしたがユキオも慌ててリンの袖を掴んだ。

「待って！ ま、ま、待た会えるよね！？」

「当たり前えだろ！ オレとユキオは“友達”だからな！」

「…友達」

リンは、今度こそ消えたがユキオは、リンの友達と言う言葉に微笑みながら小さな手を胸に当てた。

それから二人は、ちよくちよく会っていた。最初緊張していた幸男もなれ二人はまるで“兄弟”のように仲が良かった。

しかしそんな二人の仲を良く思わない人物がいた。

「リン。またどこに出かけるんですか？」

「うーん、散歩」

ざるに薬草を持ったメフィストは、いつも昼過ぎに出かけるリンを不信に思っていた。

「…分かりました。これいじょう言いませんがリン、もしも」

「もしも青の鬼に会ったら逃げろ。だろ？分かってるって！」

しかしメフィストはリンにさいさん注意しようとしたが、既にリンの姿は、なかった。

「しかしあの子…いったい何時も何処に行くのでしょうか？」

メフィストとてリンを自由に遊ばしたい、だが最近青の鬼が、この付近に出たと言う噂に居ても立っても要られずリンの後を追うことにした。

「わりいユキオ！待ったか？」

「ううん、僕も今来た所だよ」

ユキオの言葉にリンは、ほっとすると笑顔を向けた。

「今日は、何するんだ？」

「…あ、あんだかどこさがいいかな、て」

「お前相変わらず女見たいな遊びばかりしか知らないのか？」

呆れるリンにユキオは、身をすくますと次の遊びを提案した。

「じゃ、じゃ隠れんぼ」

「別にあんだかどこさでも良かったけど…いっか！」

二人が、じゃん拳で鬼になったリンが複雑な顔をしているのに気づかないユキオは、勝ちに喜んでいた。

「じゃかぞえるね？」

「いいぜ」

リンが数えようとしたが走りだそうとしたユキオの懷から赤い玉が転がり落ちた。

「おい、何か落ちたぞ？」

「ご、ごめんねリン。それとありがとう！」

ユキオは、慌ててリンの手から玉を返してもらおうと大事そうに握った。

「綺麗な玉だな、そんなに大切な物なのか？」

「ううん、分からない…けど、僕にとっては大切な物なんだ」

「ふーん、それならオレも持ってるぜ？」

「へ？」

間拔けな声を出すユキオをしりめにリンは手首まである袖から青の玉を出すと夕日に照らした。

「それを何処で…」

「…メフィが、オレのために作ってくれた大切な御守りなんだ」

リンが、幸せそうに話す言葉に幸男の手に持っていた玉がゆっくりと落ちリンの手に合った玉も落ちていった。

「ごめん、何か気分が悪いから帰るね」

「大丈夫かよ！」

「うん、少し寝てれば治るからじゃあね！」

「あ、おい！ユキオ！？」

ユキオは、リンの前から消えてしまいリンもどうすればいいのか悩んだが、とりあえずユキオが落としていった赤と自分が落とした赤の玉を拾うとリンも森の奥に消えてしまった。気の影で隠れていた男の存在に気づかずに。

「あの子供、化け物になってまで私のリンに近づくなて！」

メフィストは、翡翠の瞳に憎悪を宿しユキオが消えていった方角に目を向けた。

「リンは、誰にも渡しません…誰にも」

メフィストが、呪詛の様に吐き捨てると元来た道に戻った。

しばらくしてリンが、ユキオの元に行こうとしたがメフィストに止められ渋々後について行った。

「なあメフィ、何処まで行くんだ」

「もう少しですから頑張ってください」

「…はい」

二人が、しばらく森を歩いていると少しばかり古い祠がありそこに剣が奉られていた。

「メフィ、この剣は？」

「“降魔剣”…またの名を“俱利伽羅”といひまして私が、作った剣の中で唯一魔を滅ぼすことができる代物です」

「それをどうするんだ？」

「勿論最近私の森を荒らす鬼を退治するためです」

「鬼！鬼が来てるのか？」

リンの子供にメフィストはうっそりと笑った。

「ええ、ほら、最近薬草や果物の取りが悪いでしょ？それも全ぶ鬼のせいです。ですから私がやらなければなりません、都合が出来てしまつてね…私の代わりに鬼を退治してくれますか？」

「勿論！いつもメフィにお世話になっているからな！」

「それは良かった！ではさっそく…」

メフィストが、俱利伽羅をリンに渡そうとしたが、リンは表情を曇らせた。

「オレ何かが鬼なんて退治できるのか？」

リンの不安にメフィストは、それはそれは綺麗に笑っていた。

「できますよ。なんせ青の鬼は、貴方が知ってる子供ですから」

メフィストの言葉にリンの体温が下がり冷や汗を流しながら手で耳を塞ぐが、メフィストはそれすら許さなかった。

「青の鬼の名前は“ユキオ”。別名“人食い鬼”とも呼ばれています」

「嘘だ！ユキオは鬼なんかじゃねえ、人間だ！！」

「しかしリン。こんな村すらない森の奥に子供なんていますか？」

「いるに決まってる！いくらメフィでもユキオを馬鹿にすると許さないぞ！！」

まるで毛を逆立てている猫にメフィストは、怯えるリンの顔を覗きこんだ。

「リンは私のことが嫌いになりましたか？」

「……いいえ…愛します」

メフィストがリンの顔を覗いた瞬間彼の青の瞳から光が消え表情も無表情になっていた。

「嬉しいですよリン。では、この剣で鬼を殺せますね？」

「はい、メフィの願いなら」

リンの手に倶利伽羅を握らせたメフィストは、リンの言葉に満足しそっと柔らかい唇に軽いキスをした。

「いきなりさい」

メフィストの言葉にリンが走って行く様を眺めいきなり風が、拭いたと思ったらそこにメフィストはいなかった。

・

思い出した思い出した！何で忘れていたのかな？あの子は…リンは、僕の兄さんだ！！

「待っててね。兄さん」

記憶を取り戻したユキオは、自分が鬼の姿であることに気づかず夕暮れの森を抜け自分に向かって走って来るリンに泣き出しそうな顔を引き締め嬉しそうな笑顔でスピードを早めた。

——リンの手に剣を持っているとは気づかず。

長い月日を経て双子が久しぶりの包容を交す。

ぐちい…。

ユキオは、腹部にすぎましい痛みと肉が突き刺さる感触に抱きしめ

ていたリンが、少し体を引くと彼の手には不釣り合いな剣が握られているのに驚愕した。

「ごほお！な…にい…さん…ど、どう……て？」

リンが、剣を抜くとユキオは薄れ行く意識の中ポロポロと涙を流しながらリンの袖から出た青の玉に触れる前に頭の角が消えるとそのまま死んでしまった。

しばらく呆然としていたリンだったが、徐々に意識が戻り目の前の惨状に血に濡れた剣を落とすと血の気が失せた青白い顔で泣き出した。

「ゆ…きお…ユキオ！ユキオ！！ごめんなさいごめんなさい！！」

リンは何度も何度も壊れた人形のように繰り返していたが、背後で白い男が笑いながらリンの顔に手をかざした。

「メファイ！！」

「よくできました、リン…全て忘れて眠りなさい」

メフィストの呪文で寝てしまったリンをそっと抱き上げ血の池に倒れてるユキオを汚らわしい物を見る目で見ていたが、彼が指を鳴らすとユキオの体は炎に包まれ消えてしまった。

「この子に近づくからいけないのですよ。まあ…貴方も大好きな兄に殺されて幸せでしょ？」

メフィストは、ユキオが居た場所をしばらく眺めると興味がなくな

ったのかそのまま森へと足に向けた。

「リン、神様の森に帰りましょ？」

メフィストは、リンを抱く腕の力を強め今度こそ森の奥へと消えていった。

これは寂しい神様が引き起こした憐れな双子の話し。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8305v/>

神に愛された童

2011年10月9日10時31分発行